

地域ネットワークだより



2023 吹上浜 砂の祭典 にぎわう



5月3日(水)、「砂でつくる 夢と感動! 2023吹上浜 砂の祭典」が南さつま市で開幕し、3日間の会期中、約5万人の人出でにぎわいました。今年のテーマは「アニマルワールド ツアー～世界の名所で出会う動物たち～」で、アジア・オセアニアやアフリカ・ヨーロッパ、北米・中南米など世界各地の動物をモチーフにした37基が展示されました。砂像展示プロデューサーの茶圓勝彦さんは幅5メートル、高さ3メートル、奥行き3メートルの迫力ある砂像「アラブ交易とラクダ」で砂漠を旅するキャラバンを描いたほか、日本砂像連盟のメンバーや南さつま市の職員らによる力作が並びました。また、南さつま市は冬まつりの大雪像で有名な旭川市と砂像-雪像のつながりから姉妹都市盟約を結んでおり、旭川市からは菅野直行副市長以下13人の交流団が訪れて、砂像を制作。このほか、砂像イベントを行っている共通点から南



さつま市は今年1月、台湾南部の高雄市旗津区と交流協定の覚書を交わしましたが、そのご縁から高雄市の灯台を描いた作品が出品されるなど、南さつま市の交流の広がりが感じられる祭典でした。

この砂の祭典は、コロナ前は砂丘の杜きんぼうの特設会場で開催していましたが、3年前から砂像を市役所前の市民交流広場や本町通りの商店街、加世田麓の武家屋敷周辺などに分散し、回遊してもらうスタイルに改めています。今年は商店街で買い物を楽しむ人や、坊津などへ足を運ぶ人も目立ったということで、実行委員会は分散開催の定着に手ごたえを感じていました。

なお、MBCは砂の祭典が始まった初期の段階から実行委員会に参加しており、主に広報を担当しています。今回もテレビやラジオでイベントの開催告知を行ったほか、4月29日(土)のテレビ番組「週刊1チャンネル」では開会直前の準備風景や砂像の制作状況を生中継したり、ラジオのポニー号が生中継したりして、イベントを盛り上げるお手伝いをしました。



南さつま海道鑑真の道歩き

南さつま市の坊津地区は、仏教の発展に貢献した鑑真の上陸地として知られています。2013年、鑑真の没後1250年を記念して、鑑真の足跡に思いを馳せながら早春の南さつま海道の絶景をめぐる「南さつま海道鑑真の道歩き」がスタートしました。MBCはこのイベントでも実行委員会に参加しており、広報を担当しています。今年は2月25日(土)に開催され、10キロの日本の原風景坊津コースと12キロの亀ヶ丘東シナ海絶景コース(約12km)の2つのコースに計800名が参加し、早春のウォーキングを楽しんでいました。



▲鑑真の衣装で完歩した南さつま市・本坊輝雄市長(左)と南日本放送・中野寿康社長

4年ぶりにリアル開催

県内メディア防災会議

5月19日(金)、MBCの防災や報道の担当者らが、テレビやラジオの番組で連携している県内各地のメディアの皆さんと直接顔をあわせて意見交換する県内メディア防災会議が開かれました。



県内メディア防災会議は、気象情報の伝え方や、いざという時の情報共有のあり方などを確認して、それぞれの防災放送に役立ててもらおうと10年前から開催しています。コロナの影響で3年連続してオンラインでしたが、今回は4年ぶりのリアル開催となりました。この日は、日ごろMBCのテレビやラジオの番組に各エリアの情報を発信してくださっているCATVやコミュニティFM、フリーペーパー、Webメディアの16社から27人が参加。MBCからは報道や防災の責任者のほか、テレビ・ラジオのディレクターやアナウンサーなど20人余りが参加しました。

はじめにウェザーセンターの住吉大輔センター長が長期予報から読み取る今年の梅雨の傾向や、5月25日から運用が変わる線状降水帯に関する情報の読み解き方などを解説しました。

この後、「戦後最大級」と表現され、台風の特別警報が県内で初めて出された去年9月の台風14号の時の各メディアの取り組みが報告されました。FMきりしま(霧島市)は、城山公園の展望所に設置してある送信所への回線トラブルで無音となり、木々が倒れた山道をのこぎりで切り拓きながら復旧に努めたこと。

それでも回線トラブルの個所を特定できず、スタジオからのインターネット放送を送信所につなぎ直して、応急処置をした事例を報告しました。FMたるみず(垂水市)は、市内の全戸に防災ラジオを配布しているため、市からの情報は逐一オンエアするようにしていますが、突然の停電で自家発電の燃料が不足し、その手配に苦労したことなどを報告しました。

意見交換では、「線状降水帯の発生をいち早く把握したいのだが、どうしたらいいのか?」「いざというときにはパーソナリティに出演してほしいが、業務委託している人なので呼び出すのをためらった」など、それぞれが抱える悩みを共有していました。



使える! データ放送

テレビ電波を使って、通常の番組のほかに文字や画像を各家庭のテレビに届ける仕組みがデータ放送です。MBCのデータ放送は、ニュースや気象情報、休日診療などの生活情報をお届けしていますが、県や市町村の広報ツールとして「イベント情報」や「お知らせ」を掲載したり、緊急時には自治体独自の避難情報などを発信することができます。

【広報ツールとして】

データ放送はリモコンの「dボタン」を押すと表示されます。MBCのトップ画面には、視聴者がお住まいの市町村のボタンがあり、そこから市町村のページに移ることができます(※1)。市町村のページは、それぞれ10項目掲載することができ、1項目あたり1000文字まで記入できます。

自治体によっては、助成金や説明会、行政相談所の開設など、広報誌のコンテンツをマルチニュースしたり、イベントの開催告知や参加者募集の案内を掲載したりと、さまざまに利用していただいています。

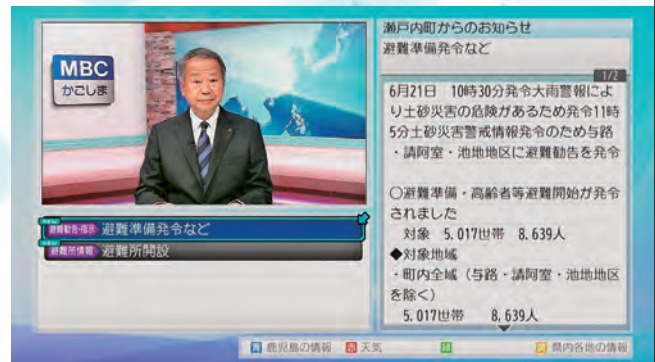
(※1 時間帯によってはドラマなどの番組と連動したデータ放送になっていることがあります。この場合は画面右下隅の「天気・ニュース」ボタンから移動できます)



▲通常画面、自治体からの情報を掲載

【緊急時には】

大雨や台風、地震などの緊急時には、避難の呼びかけや避難所の開設など、市民の生命・財産を守る情報のほか、交通機関やライフラインの乱れ、臨時休校やごみ収集の日程など、防災担当者が呼びかけたい情報を自由に発信できます。また、緊急時に自治体からデータ放送に発信された情報は、MBCの担当者が常時ウォッチし、テレビ・ラジオ・インターネットの記事にも反映させています。



▲緊急時には避難情報・避難所情報を掲載



【MBCアプリとも連動】

データ放送に発信した情報は、MBCアプリ(約27万ダウンロード)にも反映されるほか、県を通じて「Lアラート」に発信した情報は、ただちにMBCアプリにプッシュ通知されます。

再度、点検してみましょう

MBCのウェザーセンターは、天気情報を発信するだけでなく、MBCが取り組む防災活動の司令塔の役割を担っており、各市町村の防災担当者とも、日ごろから連携しています。本格的な梅雨入りを前に、データ放送への情報発信を再度点検してみてください。



アプリダウンロード数
27万

▲アプリにも連動、緊急時にはPUSH通知でお知らせ

テレビ番組「かごしま4（月～金/午後3時49分～）」で放送した各地のメディア発の話題です。

海と 日本PROJECT 干潟の 生き物図鑑完成!



あいらびゅー FM (4月19日放送)

海はさまざまなかたちで日本人の暮らしを支えているだけでなく、リクレーションや癒しの場になったり、時にひらめきを与えてくれる、まさに母なる存在です。日本財団は次の世代により良い海を残そうと、全国各地で「海と日本PROJECT」を推進しており、MBCも県内13の企業や団体と実行委員会を組織して、2016年からこの運動に取り組んできました。去年からは鹿児島県での推進母体として「一般社団法人海と日本PROJECT in 鹿児島」を設立し、活動の幅を広げてきています。

NPO法人 くすの木自然館は今年度、この「海と日本PROJECT」と連動して、始良市の重富干潟の生き物調査を行い、「錦江湾奥 干潟の生き物図鑑」としてまとめました。図鑑には重富干潟を住みかとする魚類や甲殻類、ゴカイなどの環形動物、飛来する鳥類など計225種類の生き物が収録されています。中には国内の南限での生息が記録されたサナダムシなどもいて、改めて重富干潟の多様性を感じる図鑑となっています。この図鑑は、くすの木自然館の生き物観察ツアーなどで副教材として配布されているそうです。

かのやばら園 リニューアル オープン



勝手におおすみプロモーション (4月21日放送)

鹿屋市浜田町の「かのやばら園」が、この春リニューアルオープンし、4月29日(土)から「かのやばら祭り 2023春」が開催されています。新しくなった園内を鹿屋市都市政策課の職員でガーテナーの宮地秀作さんに案内していただきました。20年間ばら園を見守ってきた宮地さんは、見ごろに、見せたい位置に花を咲かせるよう、日ごろから小枝のせん定を欠かしません。また、水鉢にバラを浮かべたり、鮮やかな和傘をディスプレイするなど、「映え」を意識したフォトスポットをあちこちに設けています。「せっかく来ていただくのだから、よそでは撮れない写真を撮って、思い出にさせていただきたい」と語る宮地さん。「かのやばら祭り 2023春」は6月4日まで開かれており、宮地さんが発見した新種のバラ「サザンホープ」の苗の販売も行われています。大隅各地を訪れ、情報を発信しているレポーターの宮内ありさんが伝えてくださいました。

春の 伝統行事 サンガツサンチ



あまみエフエム (4月27日放送)

奄美市名瀬の大浜海岸では4月22日(=旧暦3月3日・サンガツサンチ)に、伝統行事の浜下れ(はまおれ)が行われました。

サンガツサンチの浜下れは、初節句を迎える赤ちゃんの健やかな成長を願って、足を海水に浸します。

以前は女の子の行事でしたが、最近は男の子も参加するようになり、この日は約70人の赤ちゃんが集まりました。風が強く、少し肌寒い天気でしたが、泣き出す赤ちゃんは少なく、父母らは赤ちゃんの無病息災を祈りながら、小さな足をそっと浸します。浜下れの後は、記念の足型をとって持ち帰っていました。



どーんと 鹿児島



都市部での生活を見直して鹿児島県に移住する人は年々増えており、2021年度は過去最高の2077人に達しました。コロナ禍で普及したり



モトワークや自治体による移住支援策の充実も背景にあって、地方回帰はその後も続いています。5月24日(水)のテレビ番組「どーんと鹿児島(午後8時00分～)」は県内の離島に移住した人たちを特集しました。その1人、大阪府出身で徳之島伊仙町の農業 宮出博史さん(46)はコーヒーの栽培に取り組んでいます。16年前から徳之島でコーヒーの栽培を始めた宮出さんは、台風ですべての木が全滅する被害に見舞われたこともありましたが、今では2500本を栽培し、コーヒー豆だけでなく、花や果実、葉っぱなども加工販売しています。夢は奄美を国内最大のコーヒーの産地にすることだそうです。このほか喜

界島や十島で新たな生活を始めた移住者の暮らしぶりはウェブマガジン「かごしま暮らし」でも紹介しています。

